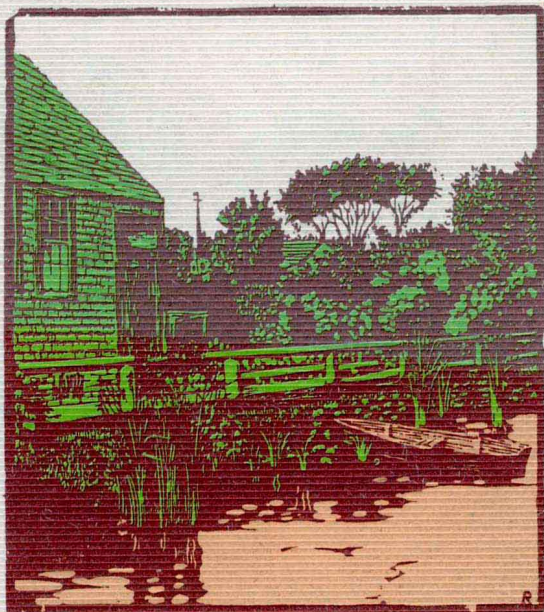


# Everyone Here Spoke Sign Language

ノラ・E・グロース 著 佐野正信 訳



みんなが手話で話した島

みんなが手話で話した島

# みんなが手話で話した島

一九九一年一月一日初版発行

著者 ノーラ・エレン・グロース

訳者 佐野正信

発行者 土井庄一郎

発行所 築地書館株式会社

東京都中央区築地二一〇—一二

電話〇三三五四二二三七三一 FAX〇三三五四一五七九九

振替東京一―一九〇五七

印刷所 壮光舎印刷株式会社+株式会社典文社

製本所 富士製本株式会社

装丁 中垣信夫+小島敏伸

© TSUKIJI SHOKAN, 1991

ISBN4-8067-2220-0 C0030 Printed in Japan

Nora Ellen Groce

Everyone Here Spoke Sign Language Hereditary Deafness on  
Martha's Vineyard

© Harvard University Press Cambridge, Massachusetts and London,  
England 1985

Japanese translation rights arranged with Harvard University Press,  
through Tuttle-Mori Agency, Inc., Tokyo

Cover drawings : Courtesy of Dukes County Historical Society

# みんなが手話で話した島

Everyone Here Spoke Sign Language

ノーラ・E・グロース著  
佐野正信訳

築地書館

# はじめる

マーサズ・ヴェンヤード島は、マサチューセッツ州南東部の大西洋岸から八キロほど沖合いに浮かぶ島である。一六四〇年代に北部人の開拓者が対岸のケープコッドから移住したこの島は、ほとんどの時代で農業・漁業を主産業とする、生活水準のさほど高くない土地だった。

だがこの隔離された島には、よそでは見られない特徴があった。この特徴によって、ヴェンヤード島は今日的な意義をもつことになる。島では三百年以上にわたり、先天性のろう者の数が飛び抜けて高い比率を示した。これは遺伝性の聴覚障害が原因だった。アメリカにやってきたイギリスの初期開拓者のもたらした遺伝子が、結婚を通じて子々孫々に伝えられていったのである。とはいえ初期開拓者の小さな核集団が、島とか高山に挟まれた谷間とかのような、比

較的外部から遮断された土地でくらすということなら、ほかにも事例がないわけではない。人類学者が同族結婚と呼び、遺伝学者が「創始者効果」と呼ぶこの婚姻形態は、すでに世界中の多くの共同体で報告されている。

それではヴィンヤード島に限って見られた特徴とは何かといえ、それはこうした遺伝の発生に対して社会的に、適応してみせたことである。ヴィンヤード島では、三百年以上にわたり、健聴者が島の手話を覚え、実生活の場でそれを用いていた。島の健聴児の多くは、ちょうどメキシコとの国境沿いでくらす今日のアメリカの子供が英語とスペイン語を覚えてしまうのと同じように、英語と手話という二言語を完全に併用しながら大人になっていった。

ろう者の社会生活や職業生活を制限しているのは、聞こえないという障害ではなく、まわりの健聴世界との間に立ちあがる言葉の壁なのだ——ろう者がしばしばこう発言しているのを考えると、ヴィンヤード島で見られた状況には大きな意義があるといえよう。そのような壁が取り除かれたとき、どのような状況が生じるのだろうか。ろう者は、そしてまたほかの障害者は、社会が万人に適応しようとした場合、自由に社会にとけ込めるのだろうか。

ヴィンヤード島は、こうした問いかけに対する答えを見つけるのにうってつけの場所である。そしてここ十年間、障害者の権利拡大運動が世界中で大きな盛り上がりを見せていることを考えると、現在ほど、こうした問いかけをするのにふさわしい時期もない。障害者や障害者の集

団が、障害者の問題の多くは、肉体や感覚や精神の障害から生じるのではなく、障害者のまえに立ちはだかつて壁——つまり人間関係や障害者観や法律の壁から生じるのだということ声を高く主張している。かれらのいい分はこうである。「少しでもこちらに合わせてください。そうすれば社会のお役に立てますから」。今や障害者の問題は、医学とりハビリテーションの領域から市民権の領域にその射程を移し変えている。

障害をもつ市民が社会にとけ込もうとしたとき、本当に社会の側では、そうした状況に適應したり、そうした状況から何かを引き出したりできるのだろうか。ヴィンヤード島の住民が三百年間にわたって経験したことは、この問いかけについて考える手がかりを与えてくれるはずである。それは私たちすべての将来とじかに関わる「自然の実験」だったのだから。

## 目次

|                                 |    |
|---------------------------------|----|
| はじめに                            | 2  |
| 凡例                              | 9  |
| I 「ほかの人間とまったく同じだった」             | 10 |
| 人類学と障害者                         | 15 |
| 情報源                             | 20 |
| 文献資料……オーラル・ヒストリー……データの断層……ベルの調査 |    |
| II マーサズ・ヴィンヤード島の歴史              | 34 |
| ヨーロッパ人の入植                       | 37 |
| ティズベリーとチルマーク……独立戦争              |    |
| 漁業全盛期のヴィンヤード島                   | 41 |
| 二十世紀                            | 47 |

### III ヴィンヤード島の聴覚障害の由来

50

遺伝性聴覚障害.....

50

遺伝の由来.....

52

ヴィンヤード島における初期の聴覚障害.....

54

ケント州ウィールド地方.....

61

隔離された遺伝子給源としてのウィールド地方

ウィールド地方の聴覚障害.....

65

清教主義.....

67

ウィールド地方からヴィンヤード島へ.....

69

シチュエートからバーンステーブルへ.....ヴィンヤード島への定住

### IV ヴィンヤード島の聴覚障害の遺伝学

78

遺伝的隔離集団としてのヴィンヤード島.....

81

下位隔離集団.....近親交配

ヴィンヤード島の聴覚障害の分布.....

90

聴覚障害の発生原因に関する理論.....93

島の聴覚障害の消滅.....103

## V 聴覚障害への適応 108

聴覚障害に対する態度.....109

島の手話.....114

手話の学習.....意思疎通上の問題.....健聴者の手話の能力.....日常生活における手話.....

島の健聴者と手話

手話の研究.....144

手話の発達.....イギリスの手話.....十九世紀のヴィンヤード島の手話

## VI 島で育つ者として育つ 158

幼少期.....160

教育.....161

結婚.....165

家族……………166

生計の維持……………168

くらし向き……………176

政治参加……………178

法的義務……………179

社会生活……………181

共同体の催し物……………188

島で最後のろう者……………195

## VII 歴史的にみた聴覚障害 206

## VIII 「あの人たちにハンディキャップはなかった」 222

訳者あとがき……………232

Bibliography……………240

## 凡例

◎原著の本文中にあった引用文献および参考資料の出典は訳文中に\*で示し、各章末にまとめた。  
詳しくは巻末の Bibliography を参照されたい。

◎訳文中「」内小活字は訳者による注、その他はすべて原典による。

「ほかの人間とまったく同じだった」

お客を車に乗せて島めぐりに連れ出すのが、ゲイル・ハンティントンハンティントンの道楽の一つになっている。島というのは、マサチューセッツ州のマーサズ・ヴィンヤード島。速度を六〇キロ以内におさえ、ところどころ島の史跡を案内してくれるのだ。一带についてのゲイルの記憶は八十年以上も昔にさかのぼる。八十年前といえば、ヴィンヤード・ヘイヴン・ハーバーに沿岸航行船がひしめき合い、ニューベッドフォードでまだ捕鯨船が活躍していたころである。まさにゲイルこそ島の語部かたまりというにふさわしい。一九七八年の十月下旬、私もまたゲイルの案内で「島西部」をまわる一人となった。道中、ゲイルはジェディダイアの家をさしてこう切り出した。「あれは付き合いいい男でした。漁や牧畜で生計を立ててました。島でも一、二を争うド―

りー「一人乗りの小舟」の使い手で、片腕なのにあいた男だと感心したものです」

「片方の腕をどうかしたんですか」

「芝刈り機にはさまれまして——まだ十五かそこらのころでしたが」

そういつてからゲイルはふと思いついたように付け加えた。

「それにあれはつんぽ<sup>†</sup>でした」

「それもそのときの事故のせいですか」

「いいえ、生まれつきです」

ヴィンヤード・ヘイヴンへの帰路、眼下にヴィンヤード海峡の大海原<sup>おおうなばら</sup>をのぞみながら、砂質の尾根をのそのそとくだつていったとき、ゲイルが左手の風雨にさらされた下見板張<sup>しみいたば</sup>りの家に

†1——原文では deaf and dumb。島では耳のきこえない人をさすのにこの語や deaf-mute が使われた。原注によると、アメリカでは「deaf-mute や deaf and dumb はどちらも侮蔑的な意味合いをもつようになり、最近では deaf という語が用いられるようになっていく」が、「マサチューセッツ・ヴィンヤード島では両語は侮蔑語とされていらないので「島民の言葉」はすべてそのまま引用することにした」という。deaf and dumb や deaf-mute が侮蔑語とされるのは、deaf（耳がきこえない）であることが必然的に dumb（口がきけない）や mute（きこえない）が原因で口がきけないのであるわけではないのに、これら結びつけてしまうのはおかしい、ということにその理由があるらしい。（日本語の「ろうあ者」には侮蔑的な意味合いはない。）また dumb という語に「まぬけ」という意味があることも関係しているのかもしれない。本書では deaf and dumb の大部分は「つんぽ」と訳したが、両者の使用域が同一ともいえないことを考慮し、あえて統一はしなかった。なお deaf は原則として「ろう（者）」と訳すことにした。——訳者注解。

チラと視線を走らせた。

「ジェディグアイの弟があそこに住んでました」

弟のナサニエルは大きな酪農場の所有者だったという。

「この弟というのが」しゃべりながらゲイルは、ググツとブレーキを入れた。

「近辺ではちょっとしたお大尽だったのです——まあチルマークの連中から見ればの話ですが。そうそう、この弟もつんぼでしたよ」

兄弟そろって生まれつき耳がきこえなかったのですか——私はゲイルにたずねてみた。ゲイルによると、原因はよくわからないが、たぶんろうが遺伝したせいだろうという。病気のためかもしれない——こんな私の思いつきに、ゲイルは首を振った。島西部に大勢のろう者があり、かれらがみな縁続きであることからして、そうは思えないのだという。かつて島には、ながいあいだ、ろう者がくらしてました。一九五〇年代の初めにその最後の一人がこの世を去ったのです。

「ろうの人はどのくらいいたんですか」

「そうですね、すぐに思い出せるのが六人——いや七人います」

「当時のチルマークの人口は？」

「二百人くらい——いや二百五十人くらいかな。それ以上ということはないでしょう」



それではかなりの割合になりそうです  
ね——私がこういうと、ゲイルは一瞬、  
ハッとしたような表情を浮かべ、それか  
らこんなふうに説明した。私もかつて、  
ろう者の多さに首をかしげることがあり  
ました。けれどもあそこの住民が何とい  
うこともなく振る舞うので、いつしかこ  
ちらの方も、気になけなくなっていたの  
です。……

次にヴィンヤード島を訪れた、ある雨  
の日の午後、わたしはゲイルに同席して  
もらって、かれの記憶にある島のろう者  
の家系を探り出そうとした。島西部に聴  
覚障害があらわれたのは、そのような障  
害をもたらす遺伝的性質が存在したため  
かもしれない——こう考えた私は、この

テーマについて少し調べてみたいと思つたのである。

島の歴史と家系に関するゲイルの知識は多岐にわたつていた。居間に腰をおろしたゲイルは、医師から厳禁されていた煙草をくゆらせたり、大好物のニューイングランド産のラム酒を何度となくかたむけたりしながら、遠い昔の出来事や半世紀かそれ以上も前に亡くなった人たちに思いをめぐらせた。話し合ううちに、ゲイルは少年時代に見知つていたろう者をさらに三、四人思い出してくれた。すべてをひつくるめると、ゲイルがまだ子供だった一九〇〇年代の初頭には、チルマークというタウン「ニューイングランド地方の集落」だけで十人のろう者がいたことになる。

タウンの健聴者がろう者をどう見ていたのかをたずねようと思つたのは、すでに数種類の系図を書きとめるのに午後のかかりの時間を費やしたあとだった。

「その点、別にどうとも思つていませんでした。ほかの人間とまったく同じでしたから」

「でも、どうやって話してたんですか。すべて筆談だったんですか」

「いや、いや——」ゲイルは私がいかに自明のことをきくに驚いたようだった。

「つまり、ここではみんな手話で話したんです」

「みんな、というのはろう者の家族とか、そういった人たちのことですか」

「ええ、その通りです」